とあり、ただひたすら浄業を修したとされる。

第二項　道俗の信仰

『利益記』を通して、隠居後の祐天に対する庶民の信仰が伝わってくる。「伝左衛門現罰を蒙りし事」（下、六丁）として、良忠寺の順阿の代に戸出村において祐天の「大幅の名号を拝受して本尊とし戸〻輪次に百万遍を修し」ていたときの話がある。伝左衛門と言う男が「農事を怠り田の畦に眠」っていた。理由を問うと「昨夜主人が親の年回なりとて。売僧が書たる名号をかけ。大数珠をくり。鉦を打て。よもすがら無間の業を造りしがいま〳〵しさに。ねふられざりしゆゑなり」と言った。この男は最後大熱を発し苦しみ叫んで息が絶えたと言う。

順阿とは『良忠寺誌』（十三頁）によれば良忠寺第四十一世で、元禄年間から住職をしており、享保七年に遷化している。

これはすなわち日蓮宗の信者に対する他宗誹謗への戒めとしての逸話であろうが、文中「祐天大僧正ハ天下乃大善知識にして、貴賤上下帰依渇仰せざるハなし」とある。祐天が家宣の大導師を勤めたことへの反響が、民間レベルにも浸透していたと見ることができるのである。この話は正徳五年十一月十七日のことと記されている。

この話をはじめ、隠居時代の話を七話載せる。大僧正時代が五話、伝通院時代が三話であるから、隠居時代、再び隠遁時代のように道俗ともに祐天を直接訪れる機会も増えたものと考えられる。祐天はすでに歩行困難な状態であったと考えられるが、慕ってくる者の話をよく聞き、また名号の施与は以前と同様に続けていたものと思われる。そして、隠遁時代とは異なり、天下の大導師として名実ともに名僧として敬慕され、また祐天はそれを少しも嵩に着せず庶民と接した姿が浮かんでくるのである。

さらに、一本松の隠居時代の遺跡として隠居所の近くの清岸寺に残る無縁塔がある。この寺は運良く戦災の消失から免れている。実はこの寺の境内に今でも祐天手植えの桜と言われる老木が枝を張っている。桜にしては珍しい幹の太い古木で実際二百年以上生きているように見える。この寺の古い山号額も祐海の筆になるもので深い関係であったことがわかる。

無縁塔は当時の住職、五世貫蓮社練誉上人遊国柳線（「縁山志」十二『浄全』十九、五七四頁）の名と多くの法名の記された面があり、その反対側に祐天名号が彫られている。日付は享保元年九月二拾有日とあることから柳線が一本松に隠居してきた祐天と結縁し無縁塔を建てたのであろう。お手植えの桜とともに今に残る祐天の生きた教化の一つである。